「銀河鉄道の夜」における死と生

山　田　耕　太

1．はじめに

宮沢賢治は生前に、詩集『春と修羅』(1924年) と童話集『注文の多い料理店』(1924年) を自費出版したのに過ぎなかった。しかもそれらはまるで売れなかった。同人誌『銅鑼』を創刊し、無名の宮沢賢治の詩集に最初から注目して同人に誘った詩人の草野心平、ならびに弟の宮沢清六らの熱意と努力がなければ、宮沢賢治は無名のまま埋もれていたかもしれない[(1)]。 今日では自費出版された詩集と童話集の数十倍もの全著作が出版され、しかも少なくとも５回に亘って全集が編まれている[(2)]。こうして、宮沢賢治は今日では国民的文学者として親しまれている。

宮沢賢治は文学・芸術・宗教の枠を越えたスケールの大きい思想家である。草野心平は、近現代詩史の中で占めるその特異な位置について「彼の詩や童話のスタイルは、もうその最初から独特なものであった。日本の詩界を見渡すと、そうしたことが甚だ稀有な現象として映る」と述べ、「白秋、光太郎、朔太郎、耿之介、慕鳥、惣之助、犀星、元磨、春夫、大学、更にはもっと若いジェネレーションの詩書とも全然違った破天荒の性格」を見た[(3)]。

詩人で彫刻家の高村光太郎は、無名の宮沢賢治に最初から注目したもう一人の詩人であったが、「内村鑑三を基督者といふと等しく、宮澤賢治を法華經者とよびたい」[(4)] と象徴的に対比して把握したように、宮沢賢治は詩人であると同時に宗教者であるユニークな存在であった。さらに最近では、社会学者の見田宗介は、焼身幻想という宮沢賢治の中心的なイメージに原罪を昇華して新しい存在となるカタルシスを見[(5)]、神道学者の鎌田東二は、宮沢賢治の思想の根底にシャーマニズムがあることを指摘する[(6)]。宗教哲学者でカトリック神学者の小野寺功は、日本の神学の樹立を試みた哲学・神学・文学の三部作で、宮沢賢治の宗教思想を「大地の思想」と把握し、それがロシア思想まで根が張った北東アジアの宗教思想の土壌に繋がる日本思想の基層に位置付ける[(7)]。

「銀河鉄道の夜」は、「風の又三郎」「ポラーノ広場」「グスコーブドリの伝記」と並ぶ宮沢賢治の長編の代表作である[(8)]。しかもそれは、科学と芸術と宗教を総合する「四次元の芸術」[(9)] の代表作であり、宮沢賢治の文学的表現の総決算でもあり、そこには「内にコスモスをもつ者」[(10)] の「コスモス」が豊かに表現されている。

本稿では、「銀河鉄道の夜」の形成史、物語構造を見た上で、そのテーマである死生観

についてアプローチする。その前に、「銀河鉄道の夜」の物語構造や死生観の前提になる「コスモロジー」（宇宙論）の骨子を把握する。

2.「銀河鉄道の夜」のコスモロジー

「銀河鉄道の夜」のコスモロジーの原型となるイメージは、北上川の川面に映った夏の夜空の銀河系、すなわち天の川にある。そこでは天上の川と地上の川が円環的に「合体」する[11]。ここから、次のような生前に発表した童謡が生まれる。

あまのがは
岸の小砂利も見いへるぞ。
底のすなごも見いへるぞ。
いつまで見ても、
見えないものは、水ばかり[12]。

「銀河鉄道の夜」へと発展していくイメージの断片は、後で触れるように『春と修羅』の詩に散見されるが、未刊の『春と修羅』第二集に収められた「薤露青（かいろせい）」[13]によって、聖なる空間へと深化していった跡が見られる。

みをつくしの列をなつかしくうかべ
薤露青の聖らかな空明のなかを
たえずさびしく湧き鳴りながら
よもすがら南十字へながれる水よ

「みをつくし」という「水先案内の杭」の間を天の川が流れ、南十字星やマジェラン星雲近くの「石炭袋」と呼ばれたブラック・ホールに流れ落ちる様を紺碧の夜空にイメージしたのである。死者の国に流れる忘却の川レーテを見るかのように。

…みをつくしの影はうつくしく水にうつり
プリオシンコーストに反射して崩れる波は
ときどきかすかな燐光をなげる…

銀河の流れが「イギリス海岸」または「プリオシン海岸」と呼んだ第三紀後半「鮮新世」の地層の見える北上川河岸の川面に反射して揺れ動く様を見る。この場面は「銀河鉄道の夜」第７章「北十字とプリオシン海岸」にも現れる。

水よわたくしの胸いっぱいの
やり場所のないかなしさを
はるかなマヂェランの星雲へとゞけてくれ
そこには赤いいさり火がゆらぎ
蠍がうす雲の上を這う

このような「かなしさ」「さびしさ」を川面に映した「宇宙感情」のイメージは、「銀河鉄道の夜」の最終形の結びでカンパネルラの死を知ったジョバンニとカンパネルラの父親を描く場面で、「下流の方の川はゞ一ぱい銀河が巨きく写ってまるで水のないそのまゝのそらのように見えました」「川下の銀河のいっぱいにうつった方へ」(14) という表現にも見られる。

「銀河鉄道の夜」はこのような詩的イマジネーションに満ちているが、実は極めて科学的な世界観を前提にしている。宮沢賢治はそれを「幻想第四次」と呼ぶ(15)。四次元空間とは、アインシュタインの特殊相対性理論(16)に基づいて、三次元空間に時間軸を加えた空間のことであり、そこでは時間と空間は独立せずに相互に関連する。

四次元空間では、第一に、$E=MC^2$により、エネルギーは物質・光の間に等式が成り立ち、物質と光はエネルギーを媒介して変換される。こうして、天上の世界は地上の世界と同様に、光と物質とエネルギーに満ちた世界となる。

ひかりというものは、ひとつのエネルギーだよ。お菓子や三角標も、みんないろいろに組みあげられたエネルギーが、またいろいろに組みあげられてできてゐる。だから規則さへさうならば、ひかりがお菓子になることもあるのだ(17)。

第二に、四次元空間は三次元空間と異なり、何億光年前に発した過去の星の光が現在の夜空に届いて見えるように、四次元空間は過去の時間的表象で満ちた「巨大に明るい時間の集積」となる。そこで、「幻想」によって過去の歴史の証拠を天上の「気圏」にも見出すことになる。

青ぞらいっぱいの無色な孔雀がいたとおもひ
新進の大学士たちは気圏のいちばんの上層
きらびやかな化石を発堀したり
あるいは白亜紀砂岩の層面に
透明な人類の巨大な足跡を
発見するかも知れません(18)

大学士が「気圏」で化石を発掘する場面は、「銀河鉄道の夜」の第７章「北十字とプリオシン海岸」に登場し、また孔雀の場面は第9章「ジョバンニの切符」に現れる。

３.「銀河鉄道の夜」の形成史

「銀河鉄道の夜」は、「ポラーノ広場」「風の又三郎」「グスコーブドリの伝記」[19] とは異なり、未刊であり未完成でもあった。「銀河鉄道の夜」には、「初期形１」「初期形２」「初期形３」「最終形」という４つの原稿が残されているが、「最終形」で大幅な差し替えと加筆・削除がなされている。初期形の始めは『春と修羅』『注文の多い料理店』を出版した1924年頃に着手されたと推定されるが、大幅な加筆改訂をしたのは「雨ニモマケズ」を書いた晩年の1931年頃と推定される。

「初期形１」は、「最終形」の第9章「ジョバンニの切符」の後半部分しか残されていない。それは大きく四つの場面で構成される。第一は、青年と女の子と男の子、それにジョバンニとカンパネルラが登場し、彼らが車中から孔雀と海豚、渡り鳥の信号手、インディアンの羽踊り、工兵大隊の架橋演習の光景を見る場面。第二は、「蠍の火」を見ながら女の子が「よだかの星」のエッセンスである「蠍の話」をする場面。第三は、列車が天上のサザンクロス駅に到着し、青年と女の子と男の子がジョバンニとカンパネルラと別れて、天上で神とまみえる場面。第四は、カンパネルラと離れ離れになったジョバンニが一人で幸いを求めて生きる決意を述べると、ブルカニロ博士が夢から覚めたジョバンニに、その決意を誉めて助言する場面である。

「初期形２」は、「最終形」のほぼ第9章「ジョバンニの切符」全体しか残されていない。「初期形１」と比べると、第9章前半部が残されているが、そこでは大きく二つの場面に分かれる。第一に、登場人物に車掌と鳥捕りが加わり、車掌の求めに応じて見せたジョバンニの切符が特別なものであることに鳥捕りが驚く場面。こうして、車中のジョバンニは特別な存在であり、後半部のジョバンニとカンパネルラの別れとジョバンニの夢からの覚醒を明確にする。第二に、家庭教師の青年と女の子（「初期形２」では三人）と男の子がタイタニック号沈没の犠牲者であることが詳細に描かれる。こうして、後半部のサザンクロス駅で降りる彼らが鷲駅付近で乗車した経緯の物語が前半部に加わり、「蠍の話」を挟んで彼らの物語が対比的に描かれる。第9章後半部は、若干の修正を除いて「初期形１」を踏襲する。

「初期形３」では、「初期形２」と比べると、「最終形」の第４章「ケンタウル祭の夜」、第５章「天気輪の柱」、第６章「銀河ステーション」、第７章「北十字とプリオシン海岸」、第８章「鳥を捕る人」に相当する部分が加わって残されている。そこでは、第一に、「鳥を捕る人」の章で、天上の世界に行く青年・女の子・男の子、またそれが暗示されるカンパネルラとは対照的な「何でもない人」[20] である鳥捕りの物語が語られ、第二に、「銀河

ステーション」の章で、カンパネルラが銀河鉄道に乗り込んできた再会の場面が語られ[21]、第三に、「ケンタウル祭の夜」の章で、カンパネルラの乗車と密接に関係するザネリの物語が語られ、第四に、「北十字とプリオシン海岸」の章で、サザンクロス（南十字）での別れの場面とは対照的に、北十字で一時下車した乗客が礼拝する場面（信仰）、ならびにそれと対比的に大学士の化石発掘する場面（科学）が描かれる。この他、「ジョバンニの切符」の章の中で、結論のブルカニロ博士の助言で「信仰と化学（科学）の一致」「歴史と地理の相対性」についての言葉が述べられた後に「プレシオスの鎖を解け」[22]という助言が追加されて、長い独白の場面に変更される。さらに、タイタニック号の沈没の描写では、「セロのような声」の削除に換えて脇役として燈台守が追加され[23]、それと関連して「ほんたうの幸（さいはひ）」に関する議論が追加される。また、青年・女の子・男の子が、それぞれ二人の子の家庭教師、12歳の「かおる子」、6歳の弟という役割・名前・性格描写が明確にされ、細かい描写の修正が施される。また、「蠍の話」の直前に「双子の星」のエッセンスが挿入される。さらに、青年・姉弟とジョバンニ・カンパネルラが別れる直前に「ほんたうの神さま」論争の対話が挿入され、両者の別れが宗教的動機に基づいていることが明確にされる。この他、「ジョバンニの切符」の章全体に亘って、削除や修正がなされ、手直しされる。

「最終形」では、第一に、冒頭の第１章「午后の授業」、第２章「活版所」、第3章「家」が新たに加筆され、それと対応して「初期形３」で「ケンタウル祭の夜」の章に記されたジョバンニの父が北方で禁猟を犯して投獄されている記述、病弱な母の労働に関する記述、貧困なジョバンニと裕福なカンパネルラを対比した記述などが削除されて、困苦するジョバンニの悲惨なイメージは弱められ、反対にジョバンニとカンパネルラの友情のモティーフが強められる。こうして、「ケンタウル祭の夜」の章は明快な記述に変わり、「銀河鉄道の夜」の導入が円滑になる。第二に、既に「初期形３」で始まっていたことであるが、「銀河ステーション」の章からも、「セロのような声」の部分を削除し、「ジョバンニの切符」の章で物語全体の結びとなる「セロのような声」の主であるブルカニロ博士の独白全体と「マヂェランの星雲」を仰いで述べるジョバンニの決意を削除し、こうしてブルカニロ博士の存在全体を消し去ることによって、ジョバンニは科学的知識などの「四次元世界」の導き手から独立し、初めて自立した存在となる。第三に、結論部分でのブルカニロ博士の削除と対応して、夢から覚めたジョバンニは、母のために牛乳を求めに行く途中で、ザネリを助けるために溺れたカンパネルラの死を知るという結末に差し替えられる。また、これらの変更に対応して、「ケンタウル祭の夜」でのザネリの描写が補強され、牛乳屋の描写などに修正が加えられ、またブルカニロ博士の削除と呼応して「博士」の役割は「ブルカニロ博士」から「カンパネルラの父」に変更される。

以上の分析から明らかなように、「初期形１」（第９章後半）、「初期形２」（第９章全体）

は断片的な部分しか残されていないが、「初期形３」（第４-９章）で初期形全体を手直しし、「最終形」（第１-９章）で大幅な修正と加筆をしたことが明らかである。また、「初期形１」から「最終形」まで一貫して物語のクライマックスの部分には変更がないことも判明する。

最初から一貫して変わらない物語のクライマックスの登場人物は、「青年・姉弟」と「ジョバンニ・カンパネルラ」の二組の人物群であり、その核心は以下の筋で構成される。

(1) 二組の登場人物群が、パノラマのように展開する光景を見て、銀河鉄道に楽しく一緒に乗っている。ただ、ジョバンニのみが、時折かなしく、さびしい。

(2)「蠍の話」を女の子が語り、ジョバンニとカンパネルラがそれを聞く。

(3) その直後にサザンクロス駅で青年・姉弟が降りて天国に行き、ジョバンニ・カンパネルラと別れる。

(4) ジョバンニとカンパネルラは「蠍」の生き方に学んで「ほんたうの幸」を求めて生きることを決意する。

(5) その直後にジョバンニとカンパネルラは別れ、一人に残されたジョバンニは「ほんとうの幸い」を求めて生きることを再度決意する。

４.「銀河鉄道の夜」の物語構造

「最終形」の物語構造を簡単にまとめておきたい。「最終形」は、大きく分けて三部に分かれる。すなわち、序論は、第1章「午后の授業」、第２章「活版所」、第３章「家」、第４章「ケンタウル祭の夜」で構成され、最初の3章で生活の貧しさ、母の病気、父の不在などに象徴される「つらさ」と「苦しみ」の現実の世界が描かれ、第4章の「ケンタウル祭の夜」で祝祭空間への入口となる。これらの章は「銀河(系)」「鉄道」「(祭り)の夜」への導入の役割も同時に果している。これと対応する結論は、第９章「ジョバンニの切符」末尾である。ジョバンニは、カンパネルラの死に象徴される地上の「つらい」現実の世界に再び戻ってくる。

その間の第５章「天気輪の柱」から第９章「ジョバンニの切符」主要部分までが本論である。ジョバンニは「天気輪の柱」で天上の世界へ上昇する。そこは「午后の授業」の教師の科学的な説明とは裏腹に、地上を反映したように野原や森があり、さまざまな光や花や宝石や香りで溢れ、鳥や魚や植物などの生命で満ち、音楽や踊りに象徴される祝祭空間である。また、ジョバンニは「銀河ステーション」で「銀河鉄道」に乗車し、「北十字とプリオシン海岸」の「北十字」から「ジョバンニの切符」の「南十字」まで「星めぐりの旅」をする。「天気輪の柱」は琴座付近に伸びている。「星めぐりの旅」は、白鳥座から始まり、鷲座、(孔雀座、海豚座、くじら座)、射手座、さそり座、ケンタウルス座、南十字座、さらにその近くの「石炭袋」と銀河系の中心部に向かって行く。それは銀河系の「十

字架」から始まり「十字架」で終わるが、真夏の夜の北上川に映る星座とほぼ一致する[24]。これは夢か現か分らない世界として描かれるが[25]、生者であるジョバンニにとっては夢として描かれ、死者にとっては現実の死後の世界として詩的イマジネーションを駆使して描かれる[26]。

また、全ては七夕とクリスマスを一緒にしたような銀河系の祭である「ケンタウル祭」という一日の出来事として描かれる。ジョバンニは午後の授業の後に、活版所での仕事を夕方6時に終え、「銀河鉄道」の経験はその祭の「夜」の出来事で、11時に白鳥駅に着き、鳥の信号手を過ぎた小さい駅に第2時に着き、サザンクロス駅に第3時に到着する[27]。さらに、物語全体が銀河系の祭りの日に置かれることにより、「銀河鉄道の夜」のテーマである死と生の問題、「いかに正しく生きるか」という問題が、ジョバンニただ一人の生き方の問題ではなく、銀河系という巨大なコミュニティ全体の問題となるように設定されている。

5.「銀河鉄道の夜」における死

「銀河鉄道の夜」では、「生」と表裏一体をなす「死」について、青年と姉弟の死、カンパネルラの死、蠍の死という、二つの場面と一つの物語で記される。それらは「溺死」という共通したモティーフで描かれる。

第一に、ボートに乗れずに溺死した青年と姉弟である。家庭教師として雇われていた大学生の青年は、小さな姉弟を助けるのが「義務」だと思い、何とか子供たちだけを助けようとする。だが、子供たちだけがボートに乗り離れ離れになって悲痛な叫び声を挙げる親たちの姿を見て、それをあきらめて二人をしっかりと抱きながら共に溺死する。

第二に、ジョバンニの親友であるカンパネルラである。カンパネルラは、ザネリが舟の上から烏うりのあかりを川に流そうとして、舟が揺れて川に落ちた所を見て、すぐに川に飛び込む。カンパネルラはザネリを舟の方へ押して、ザネリはカトウにつかまって助かるが、カンパネルラはそのまま溺死してしまう。

第三に、女の子が語るバルドラの野原にいた蠍の話である。蠍は小さな虫を殺して食べていたが、大きないたちに食べられそうになり、逃げて井戸に落ちて溺死する。溺死しながら、蠍は自分の命を惜しんだことを悔いて、次に生まれる時にはみんなの幸せのために自分のからだを捧げたいと祈る。その祈りのために闇夜の中で赤く燃える星になる。

いずれも、「溺死」ばかりか、「他者のための犠牲の死」というモティーフも共通である。第一に、青年と姉弟は、同じ船に乗っていて、「ボートに乗れた人たち」の代わりに犠牲となった。しかし、青年は「義務感」から犠牲になったのであり、また自分だけが犠牲になるのではなく、姉弟も犠牲にしてしまったのであるが、それが姉弟にとっても幸福であると考えた末である。ここで青年は姉弟の父親代わりになっているのである。

第二に、カンパネルラはザネリを救おうとして考えるひまもなくとっさに川に飛び込んだのであるが、これは「自発性」に基づいている。ザネリは、ジョバンニを冷やかして笑い、ジョバンニを見るたびに「お父さんから、ラッコの上着が来るよ」と悪口を言う子であった。カンパネルラの犠牲の死は、親友のいじめっ子に対する犠牲の死である。

第三に、弱肉強食の食物連鎖の中で生きなければならない存在論的な罪と「みにくさ」に象徴される外面的な罪が炎によって贖われるという蠍の贖罪死は「よだかの星」のエッセンスと同じであるが、「他者のための犠牲の死」を願う祈りは「よだかの星」には見られない加筆されたモティーフである。このモティーフが「銀河鉄道の夜」を貫く決定的な「ほんたうの幸」を追い求めて生きるというテーマに繋がる。

以上見てきたように、「銀河鉄道の夜」における二つの死の場面と一つの死の物語は、溺死という共通のモティーフを用いているが、「他者のための犠牲の死」というモティーフは微妙に異なる。蠍の「他者のための犠牲の死」を願う祈りに従った二例の死の場面は、義務感による犠牲の死と自発性による犠牲の死、親しい幼い者を守るための犠牲の死と親友の敵ともいうべき者を救う犠牲の死という点で、対比的に描かれている。また、この二つの対比的な水に溺れて水死する場面が、炎に燃えて焼死する「蠍の話」[28] を取り囲み、一方は夢の世界で、他方は現実の世界で語られる。

6.「銀河鉄道の夜」における生

「ほんたうの幸」とは何か。これが「銀河鉄道の夜」のテーマであり、宮沢賢治が求めていた最大の関心事であった。「銀河鉄道の夜」では、５つの場面で「ほんたうの幸」について11回議論される。すなわち、カンパネルラが母について思い出す場面、ジョバンニが鳥捕りについて回想する場面、青年が氷河とぶつかって沈没した様子を想起する場面、蠍の祈りの場面、ジョバンニの決意表明の場面である。

第一に、「北十字とプリオシン海岸」の章は、「おっかさんは、ぼくをゆるして下さるだらうか。」というカンパネルラの唐突で切迫した問いから始まる。「ぼくはおっかさんが、ほんたうに幸になるならどんなことでもする。けれども、いったいどんなことが、おっかさんの幸なんだろう。」とカンパネルラは畳掛けるようにジョバンニに問い質す。この時点では、ジョバンニはカンパネルラがザネリのために水死したことを知らないので問い掛け自体に驚く。カンパネルラは漠然と「誰だって、ほんたうにいいことしたら、いちばん幸なんだねえ。だから、おっかさんは、ぼくを許して下さると思う。」と自答する。ここが「ほんたうの幸」とは何か、というテーマの導入である。そして、次第に「ほんたうにいいこと」とは何かが問われていく。

第二に、「ジョバンニの切符」で車掌との会話の後で、ジョバンニは「がさがさした、けれども親切そうな」「茶いろの少しぼろぼろな外套を着た」「赤髭のせなかがかがんだ」

鳥捕りのしぐさを一つ一つ思い出す。ところが、ジョバンニは、ザネリがジョバンニを冷笑したように、今度は逆に鳥捕りを「ばかにしながら、この人のお菓子をたべてゐ」た。しかし、隣に座っている見ず知らずの鳥捕りが気の毒でたまらなくなり、「この人のほんたうの幸になるなら自分があの光る天の川の河原にたって百年つゞけて立って鳥をとってやってもいゝというやふな気が」する。ここに「ほんたうにいいこと」の模索が始まる。ここでは、鳥捕りは家庭教師の青年のような「立派な人」ではなく、またジョバンニにとって「見ず知らず」の人であるばかりか、「邪魔なやうな」人であり、「大へんつらい」人である。そのような人に代わって生きることが「ほんたうの幸」ではないかという考えである。

第三に、第二の場面の直後にそれと対照的に、家庭教師の青年が氷山と衝突した船が沈没した下りを述べる中で、他人を押しのけて助けるよりは、「神のお前にみんなで行く方がほんたうにこの方たちの幸福だ」と考える。その後、いろいろ試行錯誤するが、結局は最初の考えに辿り着くのである。親しい者のために犠牲の死を遂げることが「ほんたうの幸」という考えである。それとは対照的にその話を聞いて、ジョバンニは厳寒の北の海で戦って働いている人の幸いのためににどうしたらよいのかと考え、それに対して灯台守は「ほんたうの幸福」に近づくにはつらいことも経なければならないと青年を慰め、青年も「いちばんのさいはひ」に至るためには、いろいろな悲しみも神のおぼしめしであると答える。

第四に、いたちのために命を捨てることができなかった蠍は、「どうか神さま。私の心をごらん下さい。こんなにむなしく命をすてずどうかこの次にはまことのみんなの幸のために私のからだをおつかひ下さい。」と祈る。ファリサイ人と徴税人の祈り[29]を想起させるように、蠍の神に対する祈りと青年の神に対する考えは対照的である。蠍は自分の命を狙った敵であるいたちのために死なかったことを悔いた上で、「みんなの幸」のために命を捧げることを願うのである。ここに「ほんたうの幸」の究極の姿が描かれる。

第五に、ジョバンニは物語の結末で、青年と姉弟と別れた後に、カンパネルラに向かって「僕はあのさそりのやうにほんたうにみんなの幸のためならば僕のからだなんか百ぺん灼いてもかまわない」と告白するが、「ほんたうのさいはひは一体何だらう」と自問した上で、石炭袋の暗闇に向かって「みんなのほんたうのさいはひをさがしに行く」と再度決意を表明する。このような蠍に倣って生きる意思表明をした後に、ジョバンニは夢の世界から暗闇に暗示される現実世界に戻ってくる。

以上のような「ほんたうの幸」とは何かという議論と密接に関係して「ほんたうの天上」とはどこか、「ほんたうの神」とは誰かが問われる。ジョバンニは「ほんたうの天上」へ行ける切符をもっているのではあるが、カンパネルラがジョバンニと別れる直前に「ほんたうの天上」を見て、そこにカンパネルラの天上の母の姿を見、最初のカンパネルラの問いに対する回答が暗示されるが、ジョバンニにはそれがかすんで見えない。まだ地上でな

すべきことがあるからである。

カンパネルラが進んでいった天上は、青年と姉弟が降りたサザンクロスの天上とは異なるその上の「ほんたうの天上」である。その直前で青年・姉弟とジョバンニ・カンパネルラの間で「ほんたうの神さま」とは誰かが厳しく問われる。

> 「そんな神さまうその神さまだい。」「あなたの神さまうその神さまよ。」「さうぢゃないよ。」「あなたの神さまってどんな神さまですか。」「ぼくほんたうはよく知りません、けれどもそんなんでなしに、ほんたうのたった一人の神さまです。」「ほんたうの神さまはもちろんたった一人です。」「ああ、そんなんでなしにたったひとりほんたうのほんたうの神さまです[30]。」

ジョバンニとカンパネルラは「ほんたうのほんたうの神さま」を求めて、青年・姉弟らと別れ、ジョバンニはカンパネルラと別れてさらに孤独の旅を一人で続ける。北十字から南十字で描かれているキリスト教は全てカトリックの描写であり、ジョバンニは教派的なキリスト教を避けて「ほんたうの神さま」を求めていくのである[31]。

求道者のようになって求める「ほんたうの幸」とは、C. S. ルイスの『四つの愛』[32] のコンセプトを用いると、カンパネルラとその母に象徴される肉親の愛の「ストルゲー」でもなく、ジョバンニとカンパネルラに象徴される友情の愛の「フィリア」でもなく、まして男女の愛である「エロース」でもない。それは蠍の話に象徴され、カンパネルラの死に暗示される敵愛をも含む無償の神の愛「アガペー」である。宮沢賢治自身の言葉を用いれば、ジョバンニはカンパネルラとの「恋愛」[33] から解放されて、宗教情操による「正しいねがひに燃えて」地上に戻る[34]。

> もしも正しいねがひに燃えて
> じぶんとひとと万象といっしょに
> 至上福しにいたろうとする
> それをある宗教情操とするならば
> そのねがひから砕けまたは疲れ
> じぶんとそれからたつたもひとつのたましひと
> 完全そして永久にどこまでもいつしよに行かうとする
> この変態を恋愛という[35]

この「正しいねがひ」とは、宮沢賢治が花巻農学校を辞任する直前に岩手国民高等学校で行なった「農民芸術概論要綱」の中で述べた「世界全体が幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」「正しく強く生きることは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて

行くことである」という「第四次元の芸術」と呼んだ「農民芸術」の目的と一致する[36]。

7.「銀河鉄道の夜」の詩と真実

「銀河鉄道の夜」を誕生させた最大の出来事は、26歳の宮沢賢治が経験した2歳年下の最愛の妹トシの死であった。その経験が宮沢賢治の宗教性を深めたと思われる。その旅立ちと別れは「永訣の朝」「松の針」「無声慟哭」の三篇の詩に克明に描写されている。

(あめゆじゅとてちてけんじや)
はげしいはげしい熱やあえぎのあいだから
おまへはわたくしにたのんだのだ
銀河や太陽、気圏などとよばれたせかいの
そらからおちた雪のさいごのひとわんを[37]……
ああけふのうちにとほくへさらうとするいもうとよ
ほんたうにおまへはひとりでいかうとするか
わたくしにいつしよに行けとたのんでくれ
泣いてわたくしにさう言つてくれ[38]
わたくしが青ぐらい修羅をあるいてゐるとき
おまえはじぶんにさだめられたみちを
ひとりさびしく往かうとするか[39]

「風林」では、「鋼青壮麗のそらのむかう」から「ただひときれのおまえからの通信が汽車のなかでわたくしにとどいた」ことが記され[40]、「白い鳥」では、「鋭くかなしく啼く」白鳥をトシと重ねて見る[41]。宮沢賢治はトシの死後8ヶ月を経て、トシの姿を求めて、青森、宗谷岬を経て樺太まで鉄道の旅をするが、その心象風景は「青森挽歌」「オホーツク挽歌」「樺太鉄道」「鈴谷平原」「噴火湾（ノクターン）」に記される。その旅はやがて「銀河鉄道」の旅へと飛翔し、トシに関する幻想的な経験はジョバンニとカンパネルラの物語に昇華する。

それらひとのせかいのゆめはうすれ
あかつきの薔薇いろをそらにかんじ
あたらしくさはやかな感覚をかんじ
日光のなかのけむりのやうな羅（うすもの）を感じ
かがやいてほのかにわらひながら
はなやかな雲やつめたいにほひのあいだを
交錯するひかりの棒を過ぎり

われらが上方とよぶその不可思議な方角へ
それがそのようであるのをおどろきながら
大循環の風よりもさはやかにのぼつて行つた
わたくしはその跡さへたづねることができる[42]

「青森挽歌」はトシが旅立った天上の世界の霊感を受けた詩であるが、「銀河鉄道の夜」はそれを肉付けた心象風景である。そして、「わたくしはただの一どたりと　あいつだけがいいとこに行けばいいと　さういういのりはしなかったとおもひます」[43] と結ぶ。ここが「みんなのほんたうの幸」を求める出発点である[44]。すなわち、トシと賢治の純粋な兄弟愛という肉親の愛（ストルゲー）は、ジョバンニとカンパネルラの友情（フィリア）ばかりでなく、家庭教師の青年の姉弟に対する家族に似た愛からカンパネルラのザネリに対する友情を経て「蠍の祈り」（アガペー）に至るまで、いろいろな愛の形に変容していく。

さらに、「銀河鉄道の夜」を構成する重要な「溺死」のモティーフは、8歳の時に豊沢川が北上川と合流する地点で同級生の小学生の溺死を見た経験[45]と15歳の時にタイタニック号沈没の衝撃的なニュースを耳にした経験[46]に基づいている。トシの死という衝撃的な現実の出来事は、それらの溺死を見聞きした経験によって、青年と姉弟の死、カンパネルラの死、蠍の死へと変容していく。こうして、トシの死という経験を通して、「他者のための犠牲の死」を覚悟して「ほんたうの幸」を求めて生きるジョバンニの決意が生まれてくるのである[47]。

註

（1）草野心平「宮沢賢治全集由来」『宮沢賢治覚書』、講談社学芸文庫、1995年、260－270頁；高村光太郎「宮澤賢治十六回忌に因みて」『高村光太郎全集』第8巻、筑摩書房、増補版1995年（初版1958年）、242－245頁；同「筑摩書房版宮澤賢治全集」、『高村光太郎全集』第8巻、249－250頁；杉田英生「賢治全集の道程」堀尾青史『年譜　宮澤賢治伝』中公文庫、1991年、469－471頁。

（2）文圃堂版『宮澤賢治全集』全3巻（1934－35年）、十字屋版『宮澤賢治全集』全6巻別巻1（1939－44年）、筑摩書房版『宮澤賢治全集』全11巻別巻1（1956－1959年）、筑摩書房版『校本宮澤賢治全集』全14巻別巻1（1973－1977年）、筑摩書房版『新校本　宮澤賢治全集』全36巻（1995－1999年）。本稿では、最後の全集（校異篇という表記がないものは全て本文篇）を用いるが、以下では『新校本全集』と略す。この他、筑摩書房版に基づいて、いくつかの普及版全集や文庫版全集が出版されている。

（3）草野心平「宮沢賢治覚書（二）」、「四次元の芸術」、同『宮沢賢治覚書』、13、24頁。

（4）高村光太郎「（宮澤賢治は）」『高村光太郎全集』第8巻241頁。ただし、照井真臣乳、斉藤宗次郎、内村鑑三らによる宮沢賢治へのキリスト教の影響は、山田耕太「宮沢賢治とキリスト教」『新潟キリスト教史研究』第6号（1997）、1－37頁。なお、最近では「雨ニモマケズ」のモデルは斉藤宗次郎であると指摘する研究が現れている。山折哲雄「斎藤宗次郎『二荊自叙伝』解題」、斎藤宗次郎『二荊自叙伝』上巻、岩波書店、2005年、v～xxix頁。

（5）見田宗介『宮沢賢治－存在の祭りの中へ』岩波同時代ライブラリー、1991年。
（6）鎌田東二『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」精読』岩波現代文庫、2001年。
（7）小野寺功『大地の哲学』（三一書房、1983年）、同『大地の神学－聖霊論』（1992年、行路社）、同『賢治・幾太郎・大拙－大地の文学』（春風社、2001年）。尚、山口泉『宮澤賢治伝説』（河出書房新社、2004年）は、現代の社会的視点からの優れた宮沢賢治批判であるが、宗教のレベルの理解を欠いている。
（8）『新校本全集』第13巻、330 - 332頁、見田宗介『宮沢賢治』、49－50頁注、参照。
（9）「農民芸術概論」「農民芸術概論要綱」、『新校本全集』第13巻、7－16頁、参照。
（10）高村光太郎「コスモスの所持者宮澤賢治」『高村光太郎全集』第8巻、228頁。
（11）「このあたり（宮沢賢治が「イギリス海岸」と呼んだ北上川のほとり：筆者注）に立っていると、北上川はほんとうに大河だ。そしてここでは川は正確に北から南へ流れ、南の地平線―水平線と呼びたい―では、水蒸気が立ち込めて、茫々とかすんで見える。夜になれば、川は、このあたりで、銀河系と、天頂のあたりから南天にかけて、なだれ落ちるようなあの銀河系・天の川と、まさしく『合体』するのだ。」斉藤文一（文）・藤井旭（写真）『宮澤賢治　星の図誌』平凡社、1986年、15頁。
（12）『愛国婦人』第473号（1921年[大正10年]9月号）、『新校本全集』第6巻、181頁。
（13）この詩は1924年7月17日に作成された日付が入っている。『新校本全集』第3巻、105－107頁。
（14）「銀河鉄道の夜」最終形、『新校本全集』第11巻、170、171頁。
（15）ジョバンニの切符を見た車掌は「三次空間の方からお持ちになったのですか」と尋ね、鳥を取る人は「こんな不完全な幻想第四次の銀河鉄道なんか、どこまででも行ける筈でさあ」と驚く（「銀河鉄道の夜」最終形、『新校本全集』第11巻、149、150頁）。宮沢賢治の四次元論については、斉藤文一『宮澤賢治－四次元論の展開』国文社、1991年、に詳しい。
（16）アインシュタインの特殊相対性理論は1905年に発表されたが、1921年にアインスタイン『相対性原理講話』（岩波書店）と石原純『相対性原理』（岩波書店）が出版され、翌年のトシの死の時に、アインシュタインは一ヶ月以上に亘って滞日中であり、日本社会ではアインシュタイン・ブームが起こっていた。
（17）「銀河鉄道の夜」初期形３、『新校本全集』第10巻、139頁。
（18）『春と修羅』序、『新校本全集』第2巻、7－10頁。
（19）「ポランの広場」（初期形、1924年）、「ポラーノ広場」（1931年）；「風野又三郎」（初期形、1923年）、「風の又三郎」（1933年）；「ペンネンネンネネムの伝記」（前身、1922年）、「グスコンブドリの伝記」（初期形、年不詳）、「グスコーブドリの伝記」（1932年）。
（20）宮沢賢治の童話における「弱い人」と「何でもない人」の役割についての優れた考察は、吉本隆明『宮沢賢治』「第Ⅴ章『銀河鉄道の夜』の方へ」、ちくま学芸文庫、1996年、179－250頁、参照。
（21）創作メモ（草稿中のメモ、その１）、「カンパネルラをぼんやり出すこと、　カンパネルラの死に遭うこと　カンパネルラ、ザネリを救はんとして　溺る」、『新校本全集』第10巻（校異篇）、68頁。
（22）「プレシオス」は、すばる座の「プレアデス」と考えられている。全能の神がヨブに能力があるかと問うた「なんぢ昴宿（ぼうしゅく）（筆者注、すばる座）の鏈索（くさり）を結びうるや　参宿（しんしゅく）（筆者注、オリオン座）の繋縄（つなぎ）を解うるや」（ヨブ記38:31、明治元訳）を念頭において、宮沢賢治は「結ぶ」と「解く」を入れ替えたと考えられる。
（23）創作メモ（草稿中のメモ、その３）、「苹果の匂のする前に天上の燈台守　来ること必要なり」、『新校本全集』第10巻（校異篇）、69頁、参照。
（24）斉藤文一『宮沢賢治　星の図誌』「銀河鉄道はどこを走るか」121－124頁、参照。

(25) 宗左近『宮沢賢治の謎』新潮選書、1995年、92頁、「『死』と『生』の二つに分裂しながらも、『死』と『生』の二つが同時に共存している世界、それが賢治の舞台です。そういう舞台としての『中有』、これを描くことに賢治の中心はあった。」

(26) 生者が死者の国へ行って戻ってくるというモティーフは、「ひかりの素足」にも見られるが、「銀河鉄道の夜」はさらに洗練されており、後者では前者の仏教色が払拭されキリスト教色が前面に出され、イマジネーション豊かに死者の国が描かれる。また、それと呼応して、主人公側の登場人物には、「ジョバンニ」「カンパネルラ」「カトー」などイタリア人名や「ザネリ」というフィンランド人名に由来する名前が用いられている。

(27) クリスマス・イヴやニュー・イヤーズ・イヴ、古くはイースター・イヴと同様に、目覚めたままで真夜中を越すことに宗教的な意義がある、出エジプト記12:42、参照。南十字で降りる「第３時」は、十字架上の死の時刻「午後３時」と数字が一致する、マルコ15:33、参照。

(28) 蠍の焼死は、仏教の焼身供養（「法華経」薬王菩薩本事品第23など）に由来することがしばしば言及されている。しかし、「銀河鉄道の夜」では、キリスト教的モティーフが前面に出されているので、キリスト教に起源を求めることも考慮する必要がある。パウロの「愛の讃歌」の中の「わが體を焼かるる爲に付すとも、愛なくば我に益なし」（Ｉコリント書13:3、大正改訳）、参照。宮沢賢治は以下の創作メモで、天上の神に青年たちが出合う場面で、パウロについて語らせようとしていたことが窺われる、（別紙メモ）「青年白衣のひととポウロについてかたる。」、『新校本全集』第10巻（校異篇）、68頁。

(29) ルカ18:9－14。

(30)『新校本全集』第11巻、165頁。

(31)「みんながめいめいじぶんの神さまがほんたうの神さまだといふだらう、けれどもお互いほかの神さまを信ずる人たちのしたことでも涙がこぼれるだらう。それからぼくたちの心がいゝとかわるいとか議論するだらう。そして勝負がつかないだらう。」「銀河鉄道の夜」初期形３、『新校本全集』第10巻、175頁、参照。

宮沢賢治のカトリックとプロテスタントとりわけ無教会に対する態度の違いは、山田耕太「宮沢賢治とキリスト教」（註4）、参照。

(32) C. S. ルイス『四つの愛』（C. S. ルイス宗教著作集第2巻）新教出版社、1977年。訳者の蛭沼寿雄氏は、「ストルゲー」「フィリア」「エロース」「アガペー」をそれぞれ「愛情」「友情」「恋愛」「聖愛」と訳す。

(33) 創作メモ（草稿中のメモ、その２）、「カンパネルラの恋」、『新校本全集』第10巻（校異篇）、69頁、参照。

(34) 創作メモ（別紙メモ）、「開拓功成らない義人に新しい世界が現はれる」、『新校本全集』第10巻（校異篇）、69頁、参照。

(35)「小岩井農場　パート九」『春と修羅』、『新校本全集』第2巻、87頁。

(36)「農民芸術概論要綱」『新校本全集』第13巻、9頁。

(37)「永訣の朝」『春と修羅』、『新校本全集』第2巻、139頁。

(38)「松の針」『春と修羅』、『新校本全集』第2巻、142頁。

(39)「無声慟哭」『春と修羅』、『新校本全集』第2巻、143頁。

(40)「風林」『春と修羅』、『新校本全集』第2巻、148頁。

(41)「白い鳥」『春と修羅』、『新校本全集』第2巻、150－152頁。

(42)「青森挽歌」『春と修羅』、『新校本全集』第2巻、163－164頁。

(43) 「青森挽歌」『春と修羅』、『新校本全集』第2巻、168頁。

(44)「あゝ、マジェランの星雲だ。さあもうきっと僕は僕のために、僕のお母さんのために、カンパネルラのためにみんなのためにほんたうのほんたうの幸福をさがすぞ。」、「銀河鉄道の夜」初期形１、『新校本全集』第10巻、27頁、参照。

(45) 堀尾青史『年譜　宮澤賢治伝』、27頁、『新校本全集』第16巻下（年譜篇）、43－44頁、参照。

(46)『新校本全集』第16巻下（年譜篇）、79頁、参照。「いったい霧の中からは　こっちが見えるわけなのか　さよならなんていはれると　まるでわれわれ職員が　タイタニックの甲板で　Nearer my God か何かうたふ　悲壮な船客まがひである」（「今日もまたしやうがないな」（1925.1.25.）『春と修羅　第2集』、『新校本全集』第3巻、175頁、参照。

(47) 1918年1月27日付け母イチ宛トシの手紙「私は人の真似ハせず、出来る丈け大きい強い正しい者になりたいと思ひます。」『新校本全集』第16巻下（年譜篇）、140頁、参照。「正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである」、「農民芸術概論綱要」（註36）比較。